

## 洛書

## 「グローバル人材」考

松浦 健二

ノースカロライナ州のラレーでこの原稿を書いている。

この10年間、何とか時間を確保して毎年1ヶ月間は海外で過ごしてきた。かつてボストンに住んでいた頃に英語での仕事には慣れたが、実戦力を維持するには最低限の時間が必要だと身にしみている。今年はケンタッキー大とノースカロライナ州大で講演の依頼があったので、野外調査と共同研究の打ち合わせを兼ねて来ている。一緒に来た学生たちも、この1週間で慣れてきたようで、現地の学生らと楽しんで話をしている。皆、口々に自分の英語力の無さがもどかしいと言っている。必要性を自分の身で痛いほど感じることで初めて学びが始まる。

日本の大学教育において、グローバル人材の育成は私が学生だった頃からずっと掲げられているし、今の本学の改革プランの中でも、英語教育の強化とグローバル人材の育成が目標として掲げられている。長年の課題でありながら、むしろ学生の内向き志向が問題化しているということは、教育とニーズの間に何か根本的なズレがあるのかも知れない。学ぶ側に立ってみれば、英語はもちろん、グローバルに活動することすらも、何らかの目的を達成するための手段であって、それ自体が目的ではない。その必要性は、教壇から叫んで伝わるものではなく、あくまで学生本人の人生プランに基づいて実感すべきものだ。

私は正直なところ英語という言語自体には全く興味がないし、十数時間もエコノミー席に閉じ込められて海を渡りたくもない。しかし、科学に携わる者として、研究を遂行するためには英語力は不可欠であり、海外の研究者と会って交流しなければならない仕事はほとんどである。深い交流をするために必要な力を身につけるには、どうしても海外での研究



経験が年単位で必要となる。なぜなら、様々な国の研究者と楽しく対等に議論するために必要なのは、言語そのもの以上に、文化の違いを乗り越えるユーモアであったり、何より場数に裏打ちされた度胸であったりするからだ。実戦力を身につけようと思えば、TOEICのスコアを気にするより、海外に渡って外から日本を見る経験をすべきだ。

英語教育のズレの原因は、ネイティブ英語が国際英語だと錯覚しやすいところにもある。ハーバード大にいたころ、研究室には10カ国以上の学生とポスドクがいた。ロシアン英語、ジャーマン英語、スパニッシュ英語・・・、様々なアクセントの英語が飛び交う多国籍英語の環境であった。英語のネイティブ達も、多国籍英語のバリエーションを理解できるように訓練されているので、多少の発音や文法の誤りがあっても通じる。日本人は特に発音にコンプレックスを感じやすいが、大した問題ではない。シャイで話さないのが一番の問題で、「向こうの母国語に合わせてあげているのだから、ネイティブも理解の努力をするのは当然だ」くらいに思ってしまう。ネイティブがすなわち「グローバル人材」ではないように、グローバル人材の育成において、英語教育は小さなパーツの一つに過ぎない。

では、グローバルな人材とは、一体何を指すのか。思うに、それは多様性を受け入れることのできる大きなキャパをもつ人のことであろう。言語力はそのキャパを拡げるためのひとつのツールである。様々な国の人々の文化や価値観の多様性を理解し受け入れることのできる能力は、言語よりもずっと重要である。これは国際交流に限ったことではなく、科学における異分野交流においても同じであろう。専門化、細分化された個々の分野の中に閉じこもってしまっただけでは、広い視野を持ったグローバルな研究展開はできないだろう。果たして自分はグローバル人材と呼べるのか。教員自身が問い続け、学生達に進むべき方向を背中を示すことが、グローバル人材育成に最も必要なことではないだろうか。

(まつうら けんじ 農学研究科教授、専門は昆虫生態学、社会生物学)